

## 11月26日オープンミーティング報告

場所 オンライン

主催 P4C in schools KANSAI-JAPAN

参加費 無料

参加者名 一般参加8名、運営委員6名 計14名

発表者 北浦貴之 山梨県小学校教員

タイトル p4c Hawai'i 探訪記

### 発表内容

8月のp4cHIのサマーシンポジウム参加報告

8月16日～18日 ハワイでの研修

その前にp4cHIを紹介するオンラインでの研修を受けた

日本からの参加者は4名

小学校訪問：カエレブル小学校、カイルア中学校、ワイキキ小学校、サンセットビーチ調  
学校、カイルア高等学校

授業に参加して、全体的な印象としては、子どもたちが自分自身の経験と重ね合わせなが  
ら、自分の考えを述べているということ。特に詩を使ったp4cの授業が印象的だった。

Good Thinker's Tool Kitがプラットフォームになっていて、p4cHiの実践を支えていると  
いう印象がした。

キーワードとして残っているもの：Respect, Interest, Listen, Invite, Playful, Colorful, Slowly.

### Q&A

#### p4cHIで有効と考えられるものは？

Q：Good Thinker's Tool Kitもあったわけですが、Community Ball以外のもので何か有効  
なものがありましたか。

A：やはり、Good Thinker's Tool Kitはすごく大事ななと思いました。あとは、教材です  
ね。自分は教材なしでした法が面白いのではないかと思っていたが、もう一度教材を使っ  
て、チャレンジし直してみようかなと思っています。

#### 教室がカラフルなのは？

Q：プライベートの範囲が日本とは違うという感覚、フランクな感じで、話しやすいのか  
なとか、子どもたちの言いやすさとか、教師の教材の提示の仕方とか、日本とは違うのか  
なと思いました。

## なぜ日本で p4cHI が受け入れられるのか？

Q：P4C にはいろいろなタイプがあると思うが、どうして日本ではハワイ型が受け入れられているのか。

A：Dr. J. もリップマンの下で違和感を感じて、ハワイに戻って自分の実践を展開していったという経緯が大きい意味があるのではないか。ハワイ自身が色々な文化が入り込むところでもあって、それが日本にも飛んでいきやすいという面があるのではないか。その土地のいいものを生かすという考え方があるから日本でも根づきやすいのではないか。

A：Dr. J. がハワイ大学にセンターを作る直前に参加した。引っ越しのための彼の研究室の整理を手伝いに行った。その時、彼が若い頃、コミュニティボールを使い始めた頃の写真が出てきた。その時から言うには、当時リップマンのやり方がハワイではうまくいかなかった。リップマンの解説書が山のようにあったが、それは役に立たないよと言って、うまくいかなかったと言ってくれた。やはり、コミュニティボールの方がいいんだよと言ってくれた。リップマンの場合決まった型があって、子どもの主体性を見ていないのではないか。哲学をやっている人たちと話していると、自分の哲学に P4C を載せていくみたいな感じがする。哲学の知識があるだけに、そこから抜け出せない。その場合、子どもはやはり逃げていくというか、うまくいかないのではないか。それに対し、輪になって、コミュニティボールを使って、少しずつ進めていく方がいいんじゃないか。ここには、教授方法の大きな差異があるのではないかと思う。現在は指導要領も変わり、「主体的で対話的な深い学び」という方向にハワイ型は適合していると思う。ハワイ型は子どもたちに主体性を持たせるためには有効なツールだと思う。自分もこちらの方が子どもたちが話をしてくれるということは経験上有効だと思っている。

Q：批判的思考力を育むということは大切だけれども、日本の実情には合わないのではないか。それよりも知的安全性とか親和性とか他者を知るとかいう方が、ハワイ型の特徴であって、この傾向と日本とがマッチしたのではないか。

## ハワイは多様な文化的背景があるのに、日本は、教室一つとっても画一的？

A：ハワイは色々な人種の人がいるから、そういう意味で言うと、お互いを知らないが始まらないというところがある。また、人種の違いが色々な軋轢も生んでいて大変な状況だったと聞いている。先ずお互いを知ることから始めようという感覚があるのかもしれない。日本の場合は、お互いみんな知っているじゃんということが大前提みたいなものがあり、自覚してはいないがそこにどっぷりつかっている。

Q：教室の掲示がカラフルであるということだけど、日本の場合それが気になる子がいるということですが、教室は移動はするのですか。子どもは教室を移動しないのですか。

A：よく分からないが、移動はしないのではないか。日本の場合、グリーゾーンの子が気が散るので、黒板の回りの掲示には注意するようにと言われる。ハワイではそのようなこ

とは木にしていけない感じですね。自分の教室を今後どうするかは考えなければいけないが、ハワイでは子どもが自分の教室を楽しんでいる感じ。教室も、グループごとに別々な感じで、みんなが同じ机、同じ向きという感じではなくて、ばらばら。かちっとしている感じではない。

#### p4c 以外の授業では？

Q：哲学の授業はそれでいいかもしれないが、普通の授業ではどうなのか。楽しいだろうなと思う。算数の場合はどうしているのだろうか。

A：算数は問題を解くことができるようになるものであるという考え方はどうなんだろうか。今は考える力などと言われているので、算数の場合は問題の解決を説明していくということ、自分はこう考えるのだということをもつて、相手に伝えていく力が求められている。そういう意味では、P4C でやっている対話ということに対するスキルが上っていくと、算数の授業も変わっていく。そういう風に考えた方がいいのではないか。算数の進んだ学会でも従来のような分かりやすいやり方を勧めていないのではないか。日本の教室は世界から見ると特殊なのかもしれない。ハワイの場合は、教師は自分の教室が変わることはない。教室を自分の教育に合わせてデザインできる。

#### p4cHI の弱点は？

Q：印象に残ったのは、先生一人一人が自分の p4c をデザインしているということ。自分の関わっている学校は、かなりの小規模校で、アットホームな学校で、コミュニティがというものが結構できている。子どもたちはとても仲がいいし、ほあーんとしている。このようにコミュニティができているので、P4C をやるにしても、その次のステップを考えて、何かを提供していかなければいけないのではないかと教師の側は描いていかなければいけないのではないかと。リップマンの P4C とハワイのそれと、何が違うかという話があったけど、リップマンの成果としては、何よりも、子どもの哲学を始めたということがあると思うが、子どもが主体的に話すということでは問題があったのではないかとと思うが、その一方で、ハワイの p4c の、ある意味、弱点というものもしっかり見つめていかなければいけないのではないかと。それを見つめることで発展するのかなという思う。p4cHI の弱点があるとしたら、何だろうということをお聞きしたい。

A1：p4c はパラダイスではない。その上で、各自の先生が面白そうだなと言って始めている。p4c の弱点というと、自分の意見ですが、広まり方というものかもしれない。Dr. J. が 30 年かけて広めてきていることが示しているのではないかと。p4c の場合、コミュニティボールと Good Thinker's Tool Kit がセットになっているのだと思う。コミュニティとスキルが微妙な形で併存している。

A2：やはり、P4C は広まりにくい。どうしてうまくいくのかを説明できなかった。ということは、広まるということが難しいということ。p4cHI も当初は Dr. J. に依存していた。

どう広がっていくかが課題だったと思う。自分もそうだったが、やっていることが周りの人に理解してもらいにくい。コミュニティは出来ていると思いがちだが、その前提というのが果たして合っているのかなということ問い直すことによって、新たな考えが浮かんでくるし、その中で色々なものを発見できる。ツールの中の「前提を疑う」ということは大切なもの。

## 学校風土と p4c の関係は？ 日本の学校とハワイでは？

Q：先生たちの違いによって、子どもが学校に行きたくなくなったり、そうでなかったりする。今アメリカの学校に子供が通っているが、その学校でカリキュラム・ナイトというのがある。保護者がその時間に順番に教師をそれぞれの教室を訪ね、教師は自分の教育観などを保護者に説明している。その際の教師の発言が p4c の先生が言いそうだなという印象、両者に共通するものがあると感じた。別に p4c をやっている先生ではないけど、授業の中に p4c 的な要素をすごく取り入れようとしている先生が多いと感じた。子どもたちに何を考えるべきかを教えるのではなく、どう考えるかをよく伝えている。子どもたちは、先生が自分に興味を持っていてくれると感じている。確かにいろいろな先生がいるが、全体としてそういう感じ。そういう場所であれば、別に p4c という形を持っていなくても、いいんじゃないかなと思ったりする。日本の学校では確かに広がりにくいという面があるが、子どもは p4c 的なことを相談室だと言えりけど、教室では言えないことが多かった。合唱が始まると相談室にくる子が増える。何で私たちは合唱をしなければいけないのか、合唱のスローガンは誰が決めたのかとかいうことを相談室で話してくれる。ところが、そこに先生が入ってくるとセイフティーがなくなる。ハワイだとこういうことを言えるセイフティーがあるんじゃないか。学校風土ということが大きい要素となっているのではないかな。

(時間が迫っているので、次の発言者を指名)

C：哲学対話は面白くて、自分も教師になったときやってみたいと思っはいるが、新米教師が新しいことをやるには難しい風土が日本にはあるのではないかな。しかし、ハワイではみんな協力的なかなって思った。ただ、p4c がシステムとして定まっているわけではなく、色々な先生がいて、実践し、繋がっているみたいな様子があっ、自分としてもいろいろな人と繋がっていききたいなという気持ち。

C：一番興味深いなと思ったのは、先生自身が自分たちのやりたいことができるというのが一番強いなという感じ。哲学対話に関するところが色々チャレンジできる土壌、フィールドがあっ、p4c 自体を柔軟にしていくというところがあるが、日本ではまだそれが育っていないという思がある。ハワイでは、これをしなければいけない、これをすべきだ、ではなく、これもしたいあれもしたいという環境のような感じがした。

C：ハワイに行って改めて思っことは、トマス・ジャクソンがもともと中国哲学者だったので、西洋哲学ではないところにルーツがあるところに、日本で p4cHI が受け入れられる素地があるという点です。ニューヨークでの哲学対話はフランス寄り、割とバリバリ

の西洋哲学で、個人の中に批判的思考能力があって、それを育てていくんだという考えだけど、それに対しトマス・ジャクソンはそれを大きくひっくり返して、ハワイの p4c はインテレクチュアル・セーフ・コミュニティを作ることが目的だと考えていて、個人の中に能力を宿さないという考え。それが、東洋圏にいる私たちに響くものがあるのかもしれない。震災の時に東北と連絡を取り、何かできることがあればしますよと言ってくれたことが大きかったのかなと思っている。2011 年以降、ハワイ型が日本に入ってきたと思う。西洋哲学型が悪いというわけではないが、ハワイ型がユニークに見えて、ハワイ型があるのかなと感じる。

C：ハワイの p4c を体験して、子どもと向き合うことが自分と向き合うことでもあるということを感じた。システムにしないということが大切ではないか、つまり、草の根というか、隠れたところでの心のつながりのようなもの、信頼関係を地道に作っていくのが大切だと感じる。日本では、ある意味がんじがらめで教師の裁量権がないと少ないと思う。

C：自分の学校は小規模校で、6 年間底で過ごす、仲良くなるというよりもむしろ、人間関係が固まってしまい、自由にものが言えなくなる環境が作られてくる。子どもが相談室をよく訪ねるといっても、このような背景があるのではないか。色々なことを言えるクラスであれば、皆仲良くなるし、安全なクラスだと思う。学校では「べき論」が蔓延していて、排他的なところがある。

### 哲学対話による相互理解と相互尊敬の念の育成

C：ハワイは多様な文化的背景があるのに、日本は、教室一つとっても画一的なのに、どうして日本で p4cHI が評価されているのか、ということについて言えば、やはり、トマス・ジャクソンの存在が大きいと思う。日本からハワイを訪問した人はほとんど彼に心酔してしまっています。とはいえ、彼を通じてであれ、p4cHI が日本に受け入れられるのはどうしてでしょう。ハワイの場合は多文化の下で個として分断されていた子どもたちが、哲学対話によって、安全なコミュニティを作り出し、相互理解と相互尊敬が育成されたからだと思います。日本の場合は、画一的であるので、個々ばらばらではないとも言っても、かえってそのために個としての存在意義がなく、このような背景にあって、哲学対話によって、個としての相互理解と相互尊敬の念が育まれると直感したからではないか。そんなふう思う。

### コミュニティとスキル、知的安全性の根拠としてのスキル

C：先ほど、コミュニティとスキルが併存している、コミュニティボールと Good Thinker's Tool Kits がセットになっているという発言があったが、この指摘は重要ではないか。安心したコミュニティを作るのに、WREITEC が大きな役割を果たしているのではないか。例えば、なぜ？という問いは、子どもが自然に発する問いであるが、大人はこの問いに戸惑う。なぜ戸惑うかという、そのような問いが思いつかなかったからであり、

あるいはまた、忘れてしまっていたということを思い知らされるからではないか。このような事態は、子どもと大人が対等であること、むしろ、子どもの方が優れているということを含意している。つまり、WREITEC は哲学対話の参加者に平等であるという意識を生み、この問いを自由に出せることが、知的安全性を確保することになるのではないかと感じる。